

金沢大学附属図書館蔵『苔の衣』翻刻(四)

—京都市歴史資料館蔵『苔の衣』本文対照—

関本真乃

本稿は、前号(『京都大学國文學論叢』第四十一号)所載の拙稿(『金沢大学附属図書館蔵『苔の衣』翻刻(三)』——京都市歴史資料館蔵『苔の衣』本文対照——)の続きである。前号が下巻五三丁目まで、今号が下巻五四丁から最終丁までの翻刻である。

なお、八九丁と九〇丁の間には、綴じられていない八九丁が挟まっていた。字体・字配りとも八九丁とすべて一致するため、翻字は省略した。

〈凡例〉

一、字体は通行のものに統一した。
一、本文丁数については、丁のはじめに(一才)のように示し、改行は「」で示した。
一、見せ消ちは、朱の場合、あい、墨の場合、で示した。朱字書き入れは「」、墨字書き入れはゴシック体、紙片の貼付であることは「」で表した。ただし、貼付紙片に見せ消ちを意味する記号が書き込まれている場合、「ヒ」のように示した。なお貼付られていない大きな紙片の書き入れについては、稿末

にまとめて示した。

一、判読不能箇所は「■」で表した。
一、本文があるべき部分における空白は「網掛」で示した。
一、京都市歴史資料館蔵本との校異箇所は□で囲んで示した。
一、濁点を表さない「リ」や、「〇」「(」等についてはできるだけ忠実に「リ」「〇」「(」等で示した。
一、貼付紙片のみがある場合はあいうのように示した。
一、貼付紙片が訂正を示していると思われる場合、あいのように示した。

一、貼付紙片のうち、親本の字を真似て書き、本文上部に貼付たものは省略した。

(五四才)むけにちかくなるにいたくものをのみ「おもひたるけにやありしにもあらず」あへかにほそりたるにいとまきれ「ところなくふくらかなる月かけを心」くるしういとみ給ひて「いまたみならは」ぬ事なればにやいと心もとなくこそと「の給ふをいとつゝましとはちしらひたる」さまをそらうたけなるれいのあか月」には出給ふとでもいつものことゝはいひ」なから

つねよりもことなる気しきを見」(五四ウ) すてかたく心くる
しくてかへりみかち」にのみなくさめをき給ひて出もやり」給
はぬ月かけはいひしらすなつかしけ」なるをさてしもたゝいま
はかりこそ」となみたとゝめかたくかなしくてはかゝしく
ものもみえずさしもなからん人の「よそ／＼なるたにさすかな
れてたち」はなるゝはむねいたかるへしまして」かはかりなけ
のことはをたにこゝろに「しめておもひ聞えぬへくみまほしき」
(五五才) 御ありさまにてさばかりこと葉をつくし」つゝなつ
かしううちかたらひてもものし」給ひつるをもかけはけに此世の
外にて」も思ひすてにくかりぬへしあげはて」ぬれはこのくれ
そかしとおほしてものゝくなどとりしたゝめ給ふ日ころな
と」なくつもりにけるほんこなともかく」てあらんとをこかま
しかりぬへければな」くなくやりかくし給ふとて」かきつ
むる水くきもうき跡みればをき所なき悲しさそます」(五五ウ)
宮はかへり給ひても浅ましく心ほそ」けなるありさま御こゝろ
にかゝらせ給ひてかれにもまきれゆかんと覺すほとに」御か
たに御あそひあるへしとてひまな」ければいとくちおしまたけ
ふあすはう」にゐ給ふへしとてかやうの御忍ひありき」なとい
たくし給ふをきささきの宮のいと」うしろめたけにものし給へは
えしみて」おはせぬなるへし御ふみはかりそつかは」すよへの
ありさまなとこまかにて」(五六才) あすか河あすをあふ
せと思ふにもよるのへたてに身そうきぬへき」かしこには御文
を見給ふにもなみたの」ひまなしまことにこゝちさへいとあし
ければ」よひのまになかれはてなはあすか川あすのあふせ
を誰かまつへき」とかきていたしつ宮はめもよはぬもし」や
うなとにこそあらねとなつかしうあは」れなるさまみゆる筆の

なかれなとを」かきつらんすかたもみ給ふこゝちしてあはれ」
におほさる日もくれかたになるまゝには」さてもたいの君にい
ま一たひこゝろ」(五六ウ) のとかにたいめなくてやみぬるよ
さ」てもいとかなしきものにし給ひつるに」ゆくゑなく
ら」ていかにおもひ入給ふらん」と心くるしけれといとわ
かひあへるなる」心にて物をいたくつゝましく覺したる」にか
はかりわつらはしけなる事とも」にてたれも／＼覺しむつかり
たるを」ひとすちにをきところなくかたはら」いたくてかはか
りおもひをきぬへき人と」をもふりすてみえぬ山ちにおほし」
(五七才) たつなりけるいかならんにつけてもうき」身をおな
しきまにてなからへは心よりほ」かにものはかなきさまにてさ
すらふこと」もやあらんいてやとおもひとかめ給へる」あたり
にもこれゆへいたつらになりに」けりときかせたてまつらんい
まはとに」かくにかひあるへき身にあらすと覺し」なるにつけ
てもいとゝ悲しし小大夫も」はかなきものなとりしたゝむと
て」あたりにはかゝしき人もなければ」(五七ウ) やおらの
うちへすへり入てかみをかきこし」てみ給ふにわか身なからた
を／＼となつかし」き手あたりにてすぢなんとけさやかなる
さすかに人しらすかなしくとはかりかほ」にてををしあてつゝ
はさみもとられた」まはねと人みつけんかおそろしければわれ」
なく／＼そきはさみ給つまくらなるすゝ」りのはこのふたにう
ちいれてそのし」きしのかみに」うきめのみ見ゆるなきさ
を漕はなれあまの小舟にいそきのりぬる」(五八才) むかひに
きにけりと聞給へはいとゝ心」あはたゝしくてかきはつとしも
なくて」をしやり給ひぬさらはいたくふけさふら」はぬほとに
とく出させ給へかしといひな」から小大夫もいみしうあはれと

おもひ「つねよりことにこまやかにかたらし給ひつづるけさのおもかけにも立わかれ奉りぬるはなをもかなしくてのりもや」られ給はすうきふるさともしまはと「おほすにはめのみとまりて」(五八ウ) うきながら悲しき物は今はとてなれにし里を出る也けり」とかきつけて丁のひもにむすひつけ給ふ「ある人などはあからさまにものへまいる」給ふよしはせ給へはおとろくこともかな「しはかなきくしのはこひとつはかりを」とりくしてやかて小大夫はかりそのり「ぬるみちすから思ひはなれすひまなけ」なる御袖の気しき小大夫もいかに成「給ふへき御身にかとかなしうみたて奉」りたまひていまたよのうちこそすみ(五九オ) よしにわたり給ふましてふねにのりた「まひぬれはおなしみやこのうちにてた」になきわかれのかなしさはせきかねた「まへる御氣しきをたちぬる波にや」まさりかなしくみゆみやこしまやう／＼とをくこきはなるゝにつけても心ほ「そきやるかたなし小大夫はこの御くしの」すそをみつめてあきれたるさまをろか「ならんやはさはかりこそは御あたりさして」つかうまつりつれいかなりけるひまに(五九ウ) かくしもやつしはてさせ給ひにけん「さりとしてたゝなる御身にてたにものし」給はずをのつからおなしさまにてたに「おはしまさは御心さしあさからさりし」人にもめくりあひたてまつり給ひ「てんいかにかはかり心おさなきこと」おほしよりけるそとなきかなしめと「かひなしかくて思ふよりもとくすみや」しへおはしつきぬれは所のさまなども「みやこのほかはいとゝあはれに心ほそし」(六〇オ) あるしの尼君待よろこひつゝゆへ／＼し「くしつらひすへ聞え侍へるにかゝる身に」てきへおはしけるに心おさなくやく「しはて給ひけるそ心うくかな

しと」思ひけるおさなくてみ奉りしより「もいますこしねひてらうたけなる」さまをひてあはれは「君なんとながらへ」てものしたまはましかはいかなりとして「もたちにかゝることやはあるへきと涙」そこほるゝ女君はひとかたならぬゝる(六〇ウ) まとひのけにや御心もいとあしくて「誠にきえもいりぬへきやうにおほえ」給ふにもさも宮はけさはたつねやし「たまひつらんいかにかいひてかへしたて」まつりつらんあさましくゆくゑなき「ものとおほしはてぬらんとさま／＼思ひ」つゝけ給ふたひの御かたにはこのほど「ひさしくをとつれたまはさりけるに」つねよりもおほつかなくてゆめなど「にもものわひしくみえ給へはいまた」(六一オ) くらきにいのちのことなどさたしおこし「て女君の御もとへもふみこまやかに」かきて奉り給へるにとまりたる人と「よへものへなんまいる給ふへしかはいまた」帰らせ給はずとてふみをきてつ「かひをかへしたるに何となく心さはき」てさき／＼ははかなきほどの事を「いひあはせつゝのみこそしたまひしに」さほとにたち出給ふはかりのこゝを「かくとものためはさりけるこそいと」(六一ウ) あやしけれもし宮などのいとかくし「給ひてけるにやとおもふもおほつか」なくてまたたちかへり人をやり給ひ「たればたゝいまなんかゝるものをみつけ」へるといみしくなきあひたる「たいの君はこのかみのすそをみ給ふに」をろかにおほさんやは思はずなる世と「いひなからいかてさしもおもひとりけん」さるにてもかかはかりかなしく思ひたる「心さしはみしらすしてあらしをかく思ひ」(六二オ) すて給ひたるはなをまことのおやならぬ「にこそとくちおしょうらめしう覚え」給へともまたいつこのうらにいかやうに「ておはすらん宮などのさそひ給はん

に「はよもかくものし給はしきりとて」いたはしかりし身のほとをいかにも「てなし給ひけるにかとおもひやる」かたなく心うくてうへにもかゝること「侍へるとてみせ奉り給へはきこそゆ」るしなく覺しむつかりたりつれと「(六二ウ) いまたおきなくよりあはれにみをか「せ給へるにかくまでおもひとりけん」よとわかあやまちの心地してあさ「ましくおほさるゝまして宮のうへは」夜とゝもに恋しく覺しいつれは「人しれすあはれにてなみたくまれ給ふ」ひやうふ卿のこよひわたらすなり「ぬる事をいとおほされつゝあへるも」心もとなくいととく御ふみ「まかに」かきてつかはしつゝうちななめつゝ返事を「(六三才) まち給ふにほとなくかへりまいりて」おはせぬよしを申せはなにとはおほ「しわかねと御むねさはきてみかほの」かみためすゑをめしいかになること「そ宮へまいりたまへるかと思ひて」まかにとひていそき帰りまいるへき「よしおほせらるゝゆきてたつぬるに」あひしらぬ人もなくいみしうもの「さはかしけなれはいと心えず覚えて「あやしきしつめかうちなきてたち」(六三ウ) たるによりてとへはこれにおはし」つるひめ御せん

る「宮はさしも心ふかくも見えざりし有」さまにいかてさしも思ひとりけん「ざりとわれをつらしとおもふことは」何事にあるへきたゝ「すちに世を」(六四ウ) つゝましとおもひいたりしあたりのわつ「らはしきをいかにせましとおもひむす」ほれたりしありさまこのほとゝ成ては「袖のしつこもいとゝとろせけなりし」をあやしとおもひしにさすかにひとかた「にしもおもひよらざりける心のうちの「くるしさにこそとあはれにこゝろうく」おほさるゝ中にもまし「事もけに」ほとちかくなりにたるにいか成さまに「てさすらふらんと我御すくせ心うく」(六五才) おほししられ給ふむなしきあとをた「にいま一たひみんとおはせはこよひ忍」ひてわたり給ふ何心なくらうたけな「りしありさまおほしいつるにあやに」くにいとゝ恋しく覺されて道すから「も御袖もひきはなち給はすおほし」つきぬればかくといはせたまへるに「たいの君もやかて出にければおまし」引つくるひていれたてまつるにひと「よもろともになかめし月かけ覺し」(六五ウ) 出られていとたへかたくおほさるれと「人もむげに御心よはければねんし」かへしつゝすくよかにもてなし給ふに「すゝりのはこのかみをとりいてゝいみ」しうなくを見給ふにそ忍ひもあへ「たまはずをしあて給へる袖のしからみ」せきかたけなる御氣しきにそいと「おしくかなしきあはれいかなる所に」とたにきゝてかはりたらんすかた「をたに此世にいま一たひみ侍へらはやと」(六六才) いひもあへすなく氣しきことほりにも「すきていみしけなりおましところな」とを見給ふになき人のこゝちしていよ「御こゝろもみたれまさればかたみに」のたまひわきたることもなくてうち「なきつゝかへり給ふにこのかみのすち」をはいとゝ見すてかたくてはと

りて「おはしぬすみよしには日数ふるにした」かひてもの心ほそさのみまさりつゝ「すきにしかたゆくすゑの事覚しつゝ」(六六ウ)け給ふにもとにかくにいとけなかり「けるよのなを人にすものを思ひて」やみぬる身にこそいまはいかてかのち」の世をたにむなしからすなさんとおほ「すにも御心ちは日にそへてくるしう」なりまさり給ふおなしせんさいやり「水のころはへなどえむにおかしう」見所ありてしなしたればなくさめ」にはたゞつく／＼とはしちかくなかめ」ふし給へるにうみつらもたゞこゝもと」(六七オ)なればよせかへる波のこゑもいそのと「まりかちまぐらのこゝちしてさすかに」ひたすらみやこの事もおもひはなれ」たまはずあさからすかたらひてたまひ」しことのありされもつゆわすれねは」忘れしといひし人ことかはらすはよせくる浪のたよりにもとへ」とていみしうなき給ふを小大夫もかなし「う見たてまつるやう／＼夜さむになる」まゝにつまこひわふるしかのこゑを聞」給ふにも宮はたゞわか御身ひとつと」(六七ウ)おほししられて」我もしかなきてぞ明す秋のよを別れし人をこふる涙に」さらぬたに秋のあはれは忍ひかたく」おほざるにましてこのころは御そのか」はくまもなくほしつゝあかしかねたまひ」つるよな／＼もせめてのなくさめには」ありしくろかみのそきすゑをとりい」てゝ見給ふにありしてあたりなと覚し」いてられてこひしくかなしく今すこ」しみたれまされは」(六八オ)かたみそとみるに心はなくさまで乱れそまさる妹かくるかみ」宰相の三姉は宮の御めのとなればこ」の事はしめよりしりにきさきの宮」にも申けるにたゞいかに心にとめ」給ふらんあたりはいとうれしかりなんとて」露申給ふ事もなかりけるにゆく多」くまとはし給

ひてかくおほし入たるを」いかにしてなくさめ聞えんと心くるしく」わひしくおほざる何ゆへかはとおほせは」うらめしさに宮は式部卿の宮へもその」(六八ウ)のちことにわたり給ふ事もなくたゞ」つく／＼となかめふし給ひつゝかはり」たらんすかたをたにもと人わろくゆか」しうのみおほえ給ふ月日もはかなく」すきかはりつゝすみよしにはまち給ふ」ことのほどもなりぬればけふやか」きりの心ちしてすき給ふに十月十一」四日にその氣しきにいたくなやみ給へは」あま君もいかにせんとおもひさはき」たりかきりなくこゝろほそさをあは」(六九オ)れに思ひつゝけたまふにもさきのよ」のつみさり所なくおほざる宮はこの」ほとそかしと思ひやり給へはよそなか」らも此よにいまたあと」め給ふ事もや」あらんまたはかなくなり給ふらんくらきみ」ちしるへともなれかしとおほしていのり」など忍ひてせさせ給ふしにやい」たくもわつらひたまはてかきりなき」男にてうまれ給へるを見給ふに哀れ」宮の月日のすくもこゝろもとなげに」(六九ウ)のたまひしものをかくとたにしられ」奉りてかはかりものはかなき有さま」にもゆくすゑはるかにおひたち給ふ」らん御すくせをしらせてしかなとおほさざるやう／＼月日へたゞるにしたかひて」宮の御おかけまきるへくもなくお」ひいてさせ給ふをさすかにいたはしく」かたしけなくおほざるればなに事も」くるしなからのみあつかひ聞え給ふに」もさはかりさてもありぬへくあらまほしく」(七〇オ)おほしたりし御あたりにかゝる事とも」ものしたまはましかはたか御ためもいか」におもふさまに」ておひたちたまはまし」なとかはかりものはかなく心うかりけ」る身にしもかゝるちきをむすひ給ひ」けんなどこゝろはせもいますすこしおも」ひみ

たるゝけに心も目をへておもり給へは「いかにもなからへま
き身にこそと覺し」とりてつゝぬにいむことなとうけてそむ「き
はて給ぬかくては今しはしなからへて」（七〇ウ）のちの世の
つとめもせまほしくおほえた「まへといとくるしうのみなりま
さり給ふ年」もかへりぬればわか宮の御としも今ひとつそひて
いとうつくしけにおはするを「かひなきありさまなからわれさ
へみすて」聞えてゆきかくれなんのちはいかさまに「ものはか
なきやうにておひ出たまはん」すらんとあはれにうしろめたき
にうち「なかれたまふ」　ひたすらに悲しき物は鶴の子を入
えの沢にをきて別るゝ（七一才）との給ふを聞しりかほにう
ちえみ給へる「御かほのうつくしきにそかきりあらんみち」も
ゆきやるましくおほさるかくて日に「したかひこゝちもまさり
つゝまことにかき」りのさまにのみなり給ふにおりゝに「つ
けてあはれにからひたまひしことの」葉何事にもみしかゝり
けるほどさへかな「しくおほさるゝまことにいくへくもなく」
のみなり給へはやりのこしつゝをき給へ「りし宮の御ふみのせ
うゝあるをむけ」（七一ウ）にその御あたりのことしり給へ
さらんもつみ「ふかければはかなきうふきぬやうのもの」にし
たゝめてくしつゝをき給ふもわか世「つきはてぬる心ちしてく
るしおほえ」たまへはそのうはかみに「　忘れねと命はつき
ぬ契りしをまつに絶せぬ程そ悲しき」とかきつけ給ひてつゝに
きえはてた「まひぬれはあま君そよろつになくゝのちの事な
んともあつかひきこえける」わか宮のかゝるところにおはする
をいかに「（七二才）せましといははしく見奉れとわたしき」
こゆへきかたもなければかたしけなから「かくてあつかひ奉る
宮はさておなし」世にたになからへてあらはいまはみゝとな

りぬらんいか成ところにておひいづらん」など御心にはなるゝ
よなくおほつかなき「ものからとにかくにうかりける御ちきり」
なをくちおしくおほさるいてやわか心の「あまりのとかなるけ
そかしむかへとり」つゝ宰相の三ぬなどにあつけたらまし」（七
二ウ）かはたちまちにゆくゑなくはまとは「さらましいいかなる
さきの世のむくひに」ても心のきしより明くれ人しれす「心
をくたきまたまれゝの心なくさめの」よすかと思ひつるはか
くゆくゑなく「なしはてぬると覺しつゝけてひとや」りならす
涙こほれつゝふくるまで「うちまともまれ給はぬあかつきに」ゆ
めともなくありし女君のうつゝにて「見給ひしにもかはらす
いと物思はしけなる」（七三才）さまにて「　あかてのみあふ
せ絶にしかなしきに渡り河にて君を待哉」ものはかなけにてお
ひ出給ふ人のゆくゑゑかならすたつねと給へといみし「く
なくに我もかなしくていか成ところに」をきたまへることかと
とはんとおほすほ「とにいたく心まとひに御むねもさはき」て
やかてうちおとろき給ひぬれば蟹「もまことにつりするはかり
になりに」けりかひなき身ながらへてたに「（七三ウ）あらはを
のつからゆきあふせをもたのむ」へきにはかなきいのちのけに
なからへ「さりけるよとかなしくおほす中にも」いとけなきわ
か君けにいかなるところに「さすらふらんと心うくおほさるれ
といつゝくをはかりとたつね給ふへきかたなし」あけぬれはす
きやうなどあまたしたま「ひてたのみ給へる師などに忍ひつゝ
の」給ひつけて七日ゝの事せさせ給ふ「かゝるあはれなる中
にも春宮の女御」（七四才）のことを思ひ出給ふにつけてむね
は「いたくなりまさり給ふわか宮の日に」そへてはうつくしう
のみおひたち給ふ」に思はぬかたになりはてたまひぬる「ちき

りはなをくちおしつみふかくそ」おほさるゝ人しれぬわたくしものを「あつかひ侍へらんと思ひしことさへゆき」かたなくなしたれはいかにもこの世に「えんなき身そかしとおほししらる」か「たならぬ御物おもひのけにや此ほとは」（七四ウ）うちへも心よからねはことにさし出なとも」したまはぬをみかときさきもおほしな「けきたりいとつねよりもあつきとし」にて大かたもくるしけに御心ちもあし」くて春宮へもひさしくまゐり給はず」わか宮のいみしくつき奉りたまひて」久しくみえたまはぬをほもとめてなつかし」うまとはし給ふそあはれにかなしく「おほさるゝうらめしき人の御ゆかりも」かた／＼なつかしければつねはいたきたて」（七五オ）まつりつゝあつかひ聞え給ふかくて宮の「御こゝちおどろ／＼しくはあらねともひ」かすのふるにやいとくるしきおり／＼も「ましり給へ」といてやなに事につけて「も人にをとり思ふことかなはさる身は」なかくてなにのかひかあるへきと覺し」すてられてさりけなくもてなしつゝ「おほするにこのほとゝ成てはあなつ」りにくゝみえ給ふを母宮などといとわひし」と覺しさはきたりされとも打はへて」（七五ウ）もなやみ給はずすこしひまあるやうな」るおり／＼もましらせ給ふにひさしく「さやうの事なともなければいとつれ／＼」におほされとうくうの御かたに八月十五夜のえんせさせ給ふに宮いさな「ひ聞え給ふに御心もすこしひまあるや」うにおほさるればわりなくためらひ「つゝまゐり給へるを中宮もうれしく「おほしたり春宮はまちよろこひ聞え」給ふかきりなく御心よけなりし御さまの」（七六オ）ことの外にやせ／＼となり給ひていたく「物おもはしけにのみもてなやみ給ふにそ」なに事ならんとみたてまつる人ことに「そ／＼に心あ

くかるゝ心ちするまたか」やうのことにましらんこともかたく覺え「給へはさき／＼のやうにももてなやみ」たまはずみすのうちにもたまはんと「御ありさまもをしはかられてかきたて」給ふはちをとほまことにきくたひに「めつらしくあくよあるましくぞ覺さるゝ」（七六ウ）あか月になるまゝに我御心もねととも「にくもぬにすみのほりてしうふうら」くをあまたたひひきかへし給ふはち音は「いひしらすあはれ也春宮もいとうる」はしき御こゝろなれば人しれず御心の「うちのうしろめたきはしりたまはず」いとよく思ひかはし給へり女御の君も「むかしよのいとみかはし給ひしねなれば」ことに御みゝとまりて聞給ふになをいと「めてたきにも中／＼春宮なとよりは」（七七オ）おさなくよりなれ奉りたれはおほか「たにはいとなつかしく思ひきこゆるに「いかにそや思はずなる心つかひし給ふ」ことなからましかはとそおほす事とも」はてぬれはおほみきなどたひ／＼に「なりて春宮御かはらけたまはり給ふに」何事もたゝこよひにかきりつるこゝちして心ほそくおほさるゝまゝに」命たゝ我身につきなば哀れともこよひの月をかたみとやみん」と申給へは」（七七ウ）をくれなはものしづくにゝたりつゝよはの月をいかゝみるへき」との給ふ氣しきのいとあてやかになま「めかしけなりあけぬればたれも出」給へといとのとやかになかめられつゝたゝ「ましくおほさるれとめつらしくよもすから」ぬあかし給ひたりつるけにや御心ち「もいますこしみたれかはしきやうに」覺え給へは立出給ひぬかへりてうちふし」給ひぬれはおきあかるへくも覺えぬを「よもすからのかせにやとおほしなせと」（七八オ）日にしたかひてはよは／＼しき心ちし」給へはけにいかに成はてぬへきにかと」さす

かにこゝろほそくおほさるゝに「みかときさきさきなどの覚しきはきたる」さまいかにつみふかゝらんとこゝろうく「おほされけりすこしよろしきやうなる」ことのましり給ふ事もなくたゞひと「すちにいとらうたけにのみなりまさ」り給へはもしやとものはけなし給はん」とては、宮もものともにくし奉りて「(七八ウ)とのへ出させ給ふにみかとはちかくてみき」こゆるたに心くるしき御ありさまをい「まひとへへたゞりて思ひやらんおほつか」なさをなけきつゝゆるし聞え給はねと「またうちにてはさやうの御いのりもいたく」所せけなれば八月卅日にてたまひぬ」なにのしるしもはかゝしうみえ給はて」日かすのもるまゝによはけにのみ成「給へは中宮も物覚え給はすうちより」は御つかひよるひるいはすひまなく参り「(七九才)ちかふ春宮などにはあまりおさなくて」やむことなきさまにさたまらせ給ひて」はなれ聞え給ひにしかは大かたのやむ」ことなきはかりにて此宮をはむつきの」中より御あたりさらす覚し奉りて「みかともきさきもかきりなきわたくし」ものとなかなしう聞え給ふにかひく「何事もいとめてたくものし給ひにしを」よはくしき御さまをろかならずお」ほしなげかせ給ふさすかに御心ちなとの」(七九ウ)いたくよはりたる事はなけれとつくく」とふし給ひつゝきしかたゆくすゑの事」おほしつゝくるになを人に似さりける我」すくせかなもの心つきしよりして心に」ものなけかしからぬひまもなくつゝあ」に此世はやみぬへきにこそ中にも行ゑ」なくたつねうしなひたる忍ふ草いかに成」さまにておひいつらんおやこのちきりは」むすひをきながら此世にてあひみる事」たになきさまにてこそはさそふらめ」(八〇才)かたしけなく心うくそ覚しやるかな」らす行ゑたつ

ねよとありしゆめのお」もかけも御心にはなるゝよなしさすかに」あさからぬちきりにはありなからとくうの」わか宮などにはよその人に見なし聞えて」おりふしにつけてはこひしく思ひ聞ゆ」れと見たてまつることなくせめてはい」ましはしたになからへておそろしき事な」れとあの御心ひとつにたにいひしらせたて」まつらんとつみふかき事にてあんなる」(八〇ウ)ものをなとおほすそ春宮の御ためうし」ろめたきや御心ちのひまには忍ぶくさの」事を母宮にもかへすく申をきたまふ」おほつかなくうちなのらんたに此御ゆかりと」思はんはいとかなしかりぬへしましてかは」かりまで思ひかすまへ給ひたりける事を」いかにもてなしてけるにかとおほさる」式部卿の宮わたりにもありしよりのち」こよなくうとくしくなり給ひにたれと」大かたの御心はへなどのなきけありしを」(八一才)思ひいづればかゝる御なやみも人しれす」なげかしとおほされたりすみよしには」御としのそひ給ふまゝにはまきれ所なし」うつくしくてかゝるふせやのうちに」おひ出給ふもまことにそらおそろしきまで」見え給へはいかて御ゆつりの人にたつね」あひつゝかゝることを聞えぬと思へと」かゝる山かつと成てはさやうのしるへも」なけれはずみよしへたひく」にまいりつゝ聞えつへき人にはあはせ給へと小大夫あま」(八一ウ)君などはつねに申けりたの君はゆく」ぬなくまとはして後明くれねをのみな」きつゝゆめのうちにもこのよにありなしを」たにしらせ給へと山々寺く」にまいりて申」けるに天王寺へまいりたるつゝあてに」すみよしへまいり給ふたるにもこの事を」申つゝいとかなしくてつやしたるにいと」ふくるほとにまたこしにてつやする人」ありかはかり夜更たるはこのわたりの」人にこそな

とおもひつゝ露はかりまと(八二才)ろみたるゆめに行ゑし
らまほしくする(一)ことはあのこしなる人にたつねよといと(二)う
るはしきさうそくしたる人のたまふと(三)さたかに見てうちお
とろきたる心ち(四)いはんかたなくうれして(五)こしをかきよせ(六)つ
うちなくこれにもおなじさまに(七)みせさせ給ひける神の御し
るしなりけ(八)れはおもひまうけたる事にてたれそ(九)などもおほ
めかけたいの君はありつる(一〇)ゆめをかたりつゝひころの事とも
を(一一)(八二才)いとよくかたりてうちなくにこのあま(一二)君もか
なくおほし入たりしありさま(一三)わか君もむまれ給ひしほどの
こゝろ(一四)ほそさんとをいひもやらすしほたるゝ(一五)にいかさま
にもなくなり給ひけるよと(一六)思ふにとはかりものもいはれすい
みし(一七)うなき給ふやう心くるしけなりよも(一八)やう／＼あけゆけ
はやかてくしつゝ(一九)あま君のもとへいて給ふにもかみの(二〇)御し
るしなをふかくかたしけなくて道に(二一)(八三才)ふしおかみ給
ふもろ友におはしぬれは(二二)ところのさまなどの心ほそさにももの(二三)
思はさらん人たにかなしかりぬへしまし(二四)てけにかはかりおほ
されけんといま(二五)さらにやるかたなしわか宮いたきつゝ見(二六)奉
り給ふにむかしの人のおもかけにも(二七)かよひ給へるものからい
ますこしにほふ(二八)やうなるさまのそひ給へるは宮に覚え(二九)給ふ
とみゆいたくけにくゝもはちたまは(三〇)ぬものからすこしうちし
かりてつく／＼と(三一)(八三才)まほり給へる御かほのかきりな
くうつ(三二)くしきにもこれを見すて(三三)ゆきわ(三四)かれ給ひけん心の
うちをしはからるゝ(三五)かなしうおほさるけふはいたく物さは(三六)
かしよう待(三七)れはいま二三日のほどにかな(三八)らすまいらんとて出
給ひぬたつねあひた(三九)るはうれしきものからつゝむにむなく(四〇)
てみちすから涙のこほれ給ふさいしやう(四一)の三位とはかたみの

なくさめにいひかはし(一)つゝすこし給ひければいっしきさやう
へ(二)(八四才)まれなるまゝにかゝる事なといひや(三)り給へる
に三位これをみてうれしく(四)てやかてふみもちて宮へまいり
た(五)れはことに人なとさふらはて中宮そ御(六)かたはらにおはし
ますこれをなんとて(七)まいらせたるを見給ふ心ちいとあはれ(八)
にうれしくおほされつゝいま一日もとく(九)見奉らまほしけなる
御氣しきなれば(一〇)さやうにかすならぬところへなにとかは(一一)こ
と／＼しくもとて三位忍ひやかに御(一二)(八四才)むかへにまい
れとの給へはそのよしを(一三)いひつづきの日そよろしければたい
の(一四)君ともろともに御むかへにまいりぬ(一五)いつしかわか宮見た
てまつるに春宮の(一六)わか宮にもかよひつゝまきれ所なく(一七)うっ
くしけなる御かほつきをこれほとま(一八)てかゝるところにておひ
たちたまひ(一九)けるよとまつかたしけなきにもうち(二〇)なかれぬ母
君のした(二一)めつゝ奉り給ひ(二二)しものなととりくしてわたし聞え
など(二三)(八五才)するにとしころ思ひしほいかなひて(二四)うれし
きにもまたいつかほみたてまつらん(二五)と思へはかなしくてあま
君もしほた(二六)れにけり小大夫そ御ともにまいりぬる(二七)さいしや
うの三位はくしたてまつりてま(二八)いりたればみなれ給はぬとこ
ろとあやし(二九)けに御らんしなからけにくゝなきなどは(三〇)せさせ
給はてうちちはちらひつゝおはしま(三一)す御ありさまよにしらすう
つくしまみ(三二)のあたりなどはたゝむかし人とみえ給ふにそ(三三)(八
五才)宮もえ忍ひあへたまはぬきさきもこれ(三四)ほどになり給ふ
まであやし(三五)のふせやに(三六)たちなれ給ひけるよとかなしくつく
／＼(三七)となかれ給ふ宮は日にそへてよは(三八)しく(三九)のみ覚え給
ふむかしの人のゆつりをきた(四〇)まひけるふるほん(四一)なと三位み
やに御(四二)らんせさするにまつたへぬるなどかき(四三)つけられた

るをみ給ひて人めもしらす」さくりもよ」といとよはけなる御
氣しき」にならせ給ふにそ何しにもてまいりつらんと」(八六
才)くやしきまでおほゆる十四日になりぬ」れは宮の御心わざ
とくるしくし給ひつゝ「まことしく大事にもものし給ふをみかと
なとは」かきりなくおほつかなげに思ひ給ひたれ」はさやうの
事ともありのまゝにそうせん」とて中宮そあからさまにまいら
せ給ひ」ぬるみやはおとろ／＼しきやうにおはし」ませともさ
すかにまたのとやかなるやうに」てつく／＼とおほすになを女
御の御事は御心にはなるゝよなしむかし物語など」(八六ウ)
にもかゝるたくひはありかたくこそあらめ」心ほとに気ちかき
やうにはありなから」たいめんはいとかたきを思ふ心のうちを」
いま一たひいひしらせてまつりてむね」のくるしさをもやめ
はやとおもふにかなはて」むなしうなりなんするよとおほしつ
ゝ」わか御心にもむけにかきりに成にたる」やうにおほされて
いま一たひ御ありさま」をたにきかんとおほしてよきひまなれ
は」中将のないしのかたへむかひにつかはしたれば」(八七才)
ほとなくまいりぬるをたゝよりふした」まへるおましのそはへ
めしよせさせ給」て何となくいみしうなかせ給ふに内侍」もい
とかなしさはかりこゝちよけなりし」御ありさまのありし人と
もなく影など」のやうにてふさせ給ひたるをみ奉る」にかきり
なくあはれにてうちななかれぬ」あつきほとより月ころわつらひ
給ふ人」の御ありさまともなくなつかしくものかう」はしきや
うなるにいとくるしけなる御こゝ」(八七ウ)ちをねんしつゝ
かすならぬ身なりとも」なからへてたにすこさはをのつからゆ
き」あふさかもやと待にいのちをかけてなく」さむへきにつゝ
に思ひにたへすみしかく」さへ待へりけるこそこれほとんち

り」なからいま一たひみたてまつらすなんいと」つみふかくく
るしくとてうちななき給ふ」さき／＼は此世のちの世ちきりつゝ
いみしう」うらみ給へれとこよひはまことにくるしけ」におほ
しての給ふこと葉もはか／＼しくも」(八八才)つゝかねはこ
と葉すくなにてたゝいとかな」しと覺したり御まへなるしきし
をとり」給ひてふしなからうちやすみつゝかくは」かり」
思ひあまりつゝに我身はもえなゝんあはぬなけきにやるかたも
なし」とかき給へる筆のたゝすまひなどその」もんしともなく
あやしけなるをわれながら」あはれにおほさるしとけなく引む
す」ひてたまはせたりかならず御かへりなど」さき／＼のやう
にもせめさせ給はぬしも」(八八ウ)かなしくてみちすからも
なく／＼もてま」いりぬ女御の御まへのとかなればやをら」と
りいてゝ御らんせさすさすかに御手」などのあらぬものとみゆ
るをさすかに」あはれにおほされてけにいかに成給ひ」なんす
るにかと母宮などこゝろことに」此宮をはかなしき事にし奉り
給ふに」いかばかりおほしなげかんわれもおさな」くよりなれ
あそひ奉りてをしなへて」かたさりかたくこそ思ひ聞ゆるにお
も」(八九才)はすなる御心つかひこそうしろめたきお」り
／＼もあれと浅からぬちきりのほど」はおもひしらすもあらぬ
有へてうき身」のすくせおもひ聞えんに心うきわかみやの御た
めもつみふかき事もやなとに」かくにたゝわか御すくせくち
おしく覺し」つゝけてなみたくませ給ひたる御まみの」わたり
などといひしらすめてたきを」つゝあに人のいたつらに成給ふも
ことほりな」りと見たてまつるありつる御有様など」(八九ウ)
まめやかにかたり聞えてこの御かへりた」に侍へらさんこそ
むけに心もとなきやう」に心うく侍へりぬへけれなとたひ／＼

よ」せはつねよりも物あはれにおほされて「たゞ此はしに」
うき事を歎くとならば諸友に我も煙にをくるへきやは」とか
きつけてうちをかせ給ひたるをとりてやかたかへりまいりた
れは中宮」もかへらせ給ひてひまなけれと宰相三」位してまい
りたるよしを申させたれは「(九〇才) わりなくくるしけなる
御氣しきにやをら」たち出させ給ひたるに此御かへりを奉り
て覺したりつる御ありさまなどかたり」奉る御かへりを見給ふ
にめつらしきにも「いとあはれこれほとはかりを此世の思ひ
てにてやみねと覺したるにこそと心」くるしくおほされつゝい
みしうなき給ふ」まことにかきりのさまにのみおほゆれは「ま
たみたてまつらん事もいとかたくとて」をしのこひつゝいさり
入給ふを此年比は「(九〇ウ) めしよせ給ひつればおほるけに
てはゆ」るしかたくし給ひつゝさま／＼たはかり」かたらひ給
ふにまことによはくなりはて」させ給にけるよとかなしくて入
給ひ」ぬるあとにとみにもたゞれすなかれ」ける日にそへては
なからふへくもなくよは」けにのみ見え給ふをうちには聞せ給
ひて」見たてまつらてやませ給ふ事いと悲しく」おほされて
にはかにきやうかうあり宮」は物なともはか／＼しくの給はね
とかきり」(九一才) なくうれしとおほしたりたゝあら」ぬ人
のやうになる御ありさまのかなし」さうへとはかりものも聞
え給はず」かたみになかせ給ふさまいみじけなり浅ましくよは
けにたゞいまとのみ見給ふ」にかはかりあたらしき人をむなし
うみ」なし聞えんよりはわれいかにも／＼と」覺しまとはせ給
ふ夜もいたく更ぬれは」御こしよせたるよし左右の大將よせ」
とよみにも出させ給はずかたみに御手を」(九一ウ) とりつゝ
なかせ給ふさりとてあるへきこと」ならねはうへもなく／＼か

へらせ給ひぬるあ」かつきかきりにみえ給ふは、宮は御かたは」
らにそひみていかに／＼とおほしあき」れ給へるにかひもなく
うせさせ給ひぬ」うちにはかくと聞せ給ふに我をまち」給ひけ
るよとおほしめすあはれさ」うちそひ給ひていと／＼かなしく覺
し」まさる春宮もいとよくおもひかはし」給ひたりつる御中な
れはあさましく」(九二才) おほしなげきたり女御の君はみか
と中」宮などの御心のうちさへおもひやり聞え」給ひてさすか
にひとかたならずあはれに」おほさる中将の内侍もおさなくよ
り」見かはし奉るに人しれぬ御心の内も」われより外にはま
たしる人もなかりしに」ひとよの御氣しきを思ひ出奉るに」か
きりなくあはれにてさし出もせずつ」ほねにこもりてあつゝ人
しれすなきけ」りかきりある事なれば宮の御事」(九二ウ) さ
るへきさまに思ひをきて奉り給ふも」中宮は御さかさまなる御
いとなみのか」なしさをおほされつゝ御涙のひまなし」殿そよ
ろつにつかうまつり給ふ今はこと」ふりにけることなればかや
うの折ふしに」つけてはなをゆく多なくかくればはて給ひ」にし
大將殿の御事を入道とのなどは」つきせすこひ聞えつゝしほた
れ給ふ」そらの氣しきをりしりかほにかきく」もりつゝしくれ
かちになれはにや御いみ」(九三才) のほともことにあはれな
りわか宮のかゝる」こともしり給はず御心よけにはしり」さは
き給ふを此かたみをたにとゞめ給」はさらましかはと中宮あは
れに見たて」まつり給ふなけく／＼御ほうしの日になり」ぬる
をこれさへ心ほそく覺し入たり」かくて御いみも過ぬれは年の
暮にそ」中宮いらせ給ひぬるうちもいたく覺し」なけきつゝ我
御世もむけにす多になり」たる心ちせさせ給へは春つかたにを
り」(九三ウ) させ給ひなんとおほしなりぬ月日へたつ」るに

したかひてもみまほしかりし御おも」かけわすれかたくこひしくおもひいて「給ふかゝるほどにさかの院御としのつ」もりにやとき／＼なにとなくわつらひ「給ふを御か世のけにやなとたれも覚し」おとろかぬにはかにおもくならせ給ひ「てほとなくうせ給ひぬるをうへはとに」かくにあへなくあさましくおほされて「いま一たひ見たてまつらす成ぬるよと」(九四才)心うくおほしめすかやうの事によせて「三月につみにをりをあせたまひぬ」れは春宮のわか宮春宮にあさせ」給ひぬるこれを見たてまつるにも「中将は御事あはれにおほえけりこの」廿四年たもたせ給ひてあめのしたも」のとかにめくみたりつれば人々もをし」み奉らぬはなし三条の院とそ申す「中宮も院かうかうふらせ給ひぬいまは」いと御身も心やすきやうにておもひ」(九四ウ)ゆつり奉り給ふへき人もものし給はね」はさかの院に大みやの入道の宮など「心ほそくてすきさせ給ふらんと思ひ」やり給ひつゝつねにとふらひたまふお」との女御おさなくおはしましより「まいりそめたまひてところ成給ひ」ぬるをさしをきてこし奉らんといと「おしくて皇后宮と申をは思はず」にめてたしといひけるさてみやの「女御の君を中宮と聞えけりかくて」(九五才)やう／＼月日も過ゆきて秋のなかは」にもなりぬれば八月十五夜のくまな」きにも兵部卿の宮のこよひの月を」との給ひしことをおほしめし出でう」へは人しれすしほたれさせたまふ」中宮もめつらかなりしひはの音お」もひ出給ひあはれにおほさる御はて」にもなりぬれば院は宮などは事」となく覚しいとなむにつけても御」なみたとゝめかたけなり九月斗より」(九五ウ)中宮もものゝけたちてわつらはせ給ふ」に又いか成事にかとおほしきはきた」るに年などかへり

てはいとゝあつしく「みえ給へは御いのりなとこちたてつゝ」に出給ひぬ聞えあるとおほし聞えし」けんしやともめしてさま／＼「かちし」給へとすこしもそのしるしなくて日々に」おもりつゝひまあれはたえいり／＼し」たまふにものおほゆる人もなし殿などは「またもおほせぬ御はらかなればかた／＼」(九六才)さりかたくおもひかはしたてまつり給ひ」ていかにせんとかうまつり給へとたゝ」いまはなにのしるしもみえすさてもかの「みねにはたのみ給へりしあしせんも露」ときえにし後はいとゝはるゝよなくた「かき峯ふかき谷のそこまでも思ひ入」つゝおこなひ給ふさままことにむなし」からしとみゆるてんけう大師末代の「衆生のためにつくりをき奉り給へは」けんしやうしんのやくしによらいに」(九六ウ)今一たひまいりて像法転時のちかひ」たかへ給ふなと申さまほしくてわりな」く忍ひつゝ中たうにまいりてつやし」給ひつる夜いと物さはかしけにす」の「たひ／＼聞ゆるを何事ならんとおほすに」ゆめともないくいとたうとけなるそう」かたはらにみて此人なんぢならてはたす」くへき人なしおやこの契りはなをふか」きものなりこのたひの命かならず」いけ給へと給ふをいとこゝろえす程に」(九七才)そうともなんとのおまたるあつまりて」この事こそあちきなけれ春宮の御」母中宮にてわくかたなくめたき事」に申せとかきりある道はちからをよ」はず事にこそつゝにはといへは又ある」僧これはたか御むすめにかととへは」いまの入道とのゝ御子またもおほせさり」しか大納言の大將にて世になくかなし」き事に思ひ聞え給ひたりしにみめ」かたちよりはしめてさへさいかくに」(九七ウ)つけて世にとりて何事にもあまり」給ひたりといはれ給ひしかはにや俄」にいつちともなくうせさ

せ給ひてこの廿一年にをよひたれといきてやおはすらんいか成給ひける人なしその御むすめそかしいもうとの女院に申をき給ひたりけるとてたうしの春宮と申時よりまいらせ給ふにわつらひ給ひけるかいまはかきりに成給ひたるとてよひもたひすきやうもてまいりつる(九八才)なとかたるを聞給ひさる事ありしそかしとゆめの心ちしてあはれにおほさる中にもかく聞なからあれをたすけさらんこそむけにしひなき心ちすれおやこのをんあいはほとけもゆるし給ふ事なりさるへくてこそほとけの御をしへもありつらめなどおほしてほのくとするほにみやこのかたへうちむきてをり給ふにあさましき山はやしにのみなれ給ひてみなれにし道もふみ(九八ウ)まとはれ給へとほとけのしるへにやありけんたとるひつしの時はかりにそそのわたりへまいりつき給へるみちもさりあへすものも聞えぬまてなる馬車をいとあはれの輪廻のこうやみ給ふわりなくたとりいりて殿上とおほしきところのまへにてこよひ中堂に侍へりつるにいそきまいりてかちにまいるへきゆめなんみ侍へりつればいそきをりて侍へるさやうの事なんともいまたしり(九九才)侍へらねとほとけの御しるへのしるしもやと御こころみさふらへかしのたまへはたれもたれもをこましけにおもひつはかしくきもいれすかきりになりはて給ひぬとてまたのしるに殿こなたへ出給ひてあれは何そととひ給へはかゝることなんと申す人あればものころろみんとおほしてこなたへくと御てつからいつきいれてやをらまいり給ふ気しきにあさましけなるすかた(九九ウ)なれとあはれけに物なつかしけにて見めなどのいひしらすあさましけな

るすかたにやせさらほひたれとさすかにゆへしくなまめかしきやうなるを殿もあやしくみ給へと思ひよるへき事ならねはかゝる事など申すにうちにいり給ひぬけをすりさうなく度脱一切者病死海とよみいたしたるこ多そいひしらすあはれに心ほそくてさはかりなりみちたる殿のうちなりしつ(一〇〇才)まりぬるにやとまて聞えたるをたれも思はずにあさましくきこえ給ふ中宮はたえいり給ひたりつるかすこしうちみしろきてめうをんほんのすゑつかたになるほとよりにき給ふさまいみしけなるくはんはてぬればふとうのしこんゆるらかにみて給ふに今すこしなきまさりていと世をつましけにおほしたればこころみに人くもみなのけつ女院はかりおはしますにさしよした(一〇〇ウ)まひて此世にはさすかに深き契りにてあはて別れしことの悲しき思はずなる心のほどを身をかへてのちつゝあにかくとしられ奉りぬるこそかたくころろくさきたち奉りにしつみにいとやるかたなかり物思ひさしそへていとくるしくとの給ふけしきたゆけさなどいまはのほかにまきるへくもなくたそれかと聞ゆるに女院は夢の心ちし給ひてこれにつけてもおもはずにあさまししと(一〇一才)は露おほされすさほとまておほしけることをしらすりける心うさあらぬすちにひきたかへつ春宮にわかたてまつりけんそくやくおほさるあやしとは思ひきさはかりこちよけなりし御さま人のおとなりてはわさとももの思はしけにのみものし給ひしかは心えわきたる事もなかりしになとか露ほめかし給はさりけんいかにそれをくちおしくおほしけんたと又立かへり(一〇一ウ)かなしくてなき給ふさまかきりな

しさめ「給ひぬるのちにありつる御氣しきのみ」御心にかゝりて女院はあかすかなしく「おほさるさてもこの山伏たれならん」かはかりわれはとおもひたる人くすこしもしるしもなかりつる事をかくやすら「かにしらせつるよとうれしくたうと」くおほえ給ふものけはさりぬれは今は「出なんとするに殿いてあひたまひて」なくよるこひつる中にもいかやう（一〇二才）なるのそみの給ふともかくもたかへ「聞えしなこりなといとをほろしう見」え給ふにいま七日はかりおなしくはぬ「給へと袖をひかへつととめ給ふさまの」いとさなかりしほとのおもかけおもひ「出られつゝあはれにおほさるれと殿は「露おほしよりけもなきそかはりに」ける御身のほとしらはて給ふ姫君の「ねいりたまひしをおとるかされていと」はつかしうその給へりし御かほつきも只（一〇二ウ）今そ思ひ出られつゝふし給ふ御あり様も「さすかにゆかしうあはれにおほし給ふ」をいてや何事につけてもうき世なりや「こひしとてつゝあのみちにはたれもくし聞ゆへきはとおほしつもりていたく」とゝめたまへはいかにものたまはんにぞ「したかひ侍へらめそれにとりて何事も」この世のくはほういかにもくのそまし「き事侍へらす唯ほとけの御をしへに」つゝるみにかち参り侍るに（一〇三才）をこたりおはしますすよしうけたまはり侍へればそれこそよろこひにてさふらへ」とて殿上のかたへ立出給ふにはかなき「硯のみゆれば人のみぬまにとつこつゝ」みたるかみに」身をかへて誠の道に入ぬれと猶このやみにま

よひぬる哉」とかきつけてやをらかへりたまひぬ」いたくくれぬれはみすのうちにさし入て「これなんまほりにとて奉り給ふさて」ひしめきたる中にてなにとなく（一〇三ウ）まきれ出給ひぬるをしる人なしなを宮「古ちかきはかくこゝろよはき事もまし」るなりけれと心うくてもとのすみかよ「りもいまきは鳥のこゑまれにて」檀特山もかくやとみゆるところにて「おこなひ給ふ宮にはもとめうしなひて」いとあへなくあさましくおほしあひた」るにほとけなどのへんけにておはし「けるにやとおほすにおほつかなくて」このとつこを見給ふにかくかゝれたるを（一〇四才）御らんしつけたるを女院の御こゝちた」とへんかたなし殿中宮などはせきか「ね給へる御氣しきことはりなりとそ」

貼付されていない紙片の内容を以下に示す。

六八才 「きいかはかり／才三行」
七三才 「ていのかた／才四行」

〔付記〕 貴重な資料の翻刻をご許可くださった金沢大学附属図書館に御礼申し上げます。

なお本稿は科学研究費助成金若手（B）『吾の衣』諸伝本の本文研究及び校本作成（課題番号 16K16774）の成果によるものである。

（せきもと まさの・北海学園大学人文学部講師）